
すたーらいと☆アイドル
COLORFUL TOP STAGE!
禁煙
MANA
JUN
MIDORI
AIKA
2014 クレッセント
ライブツアー パンフレット
2014
CRESCENT
LIVE TOUR
CRESCENT.

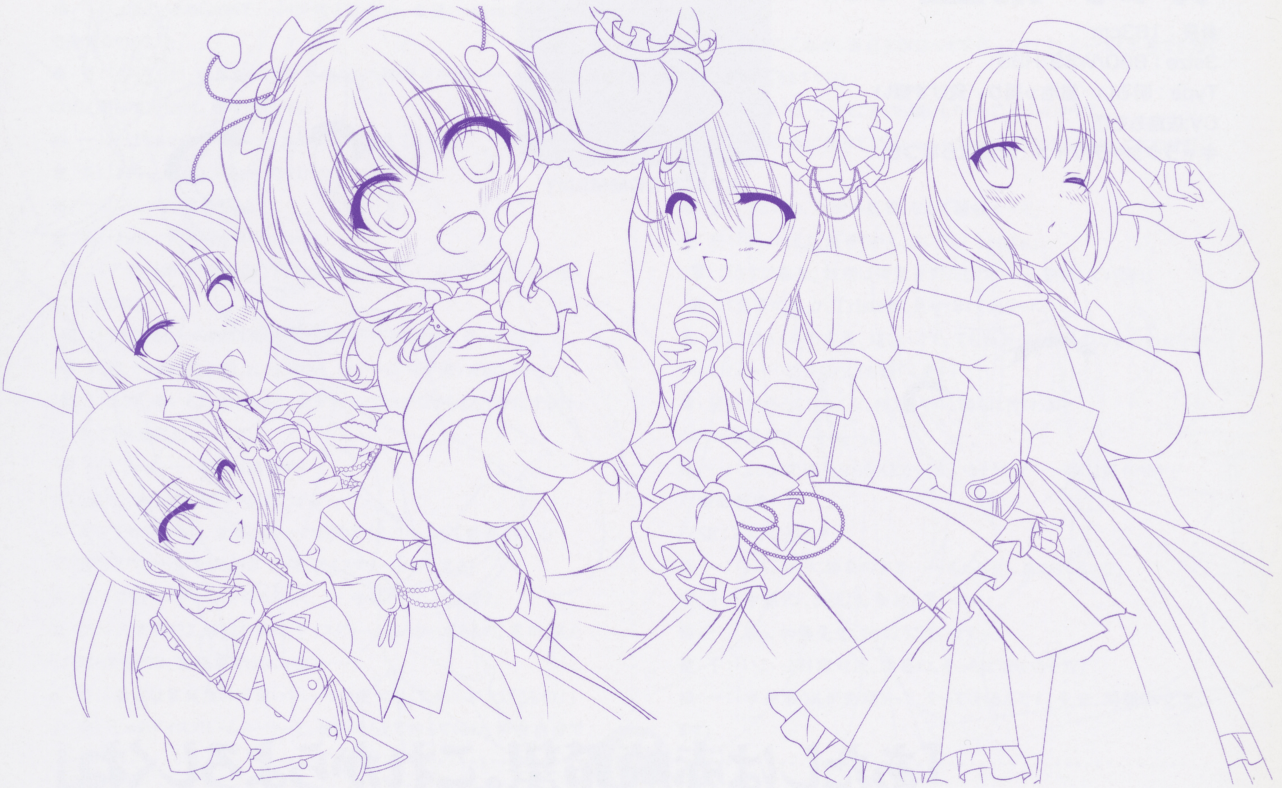

2014 クレッセント
ライブツアー パンフレット
2014
CRESCENT
LIVE TOUR

●イメージビジュアル&ライブシーン

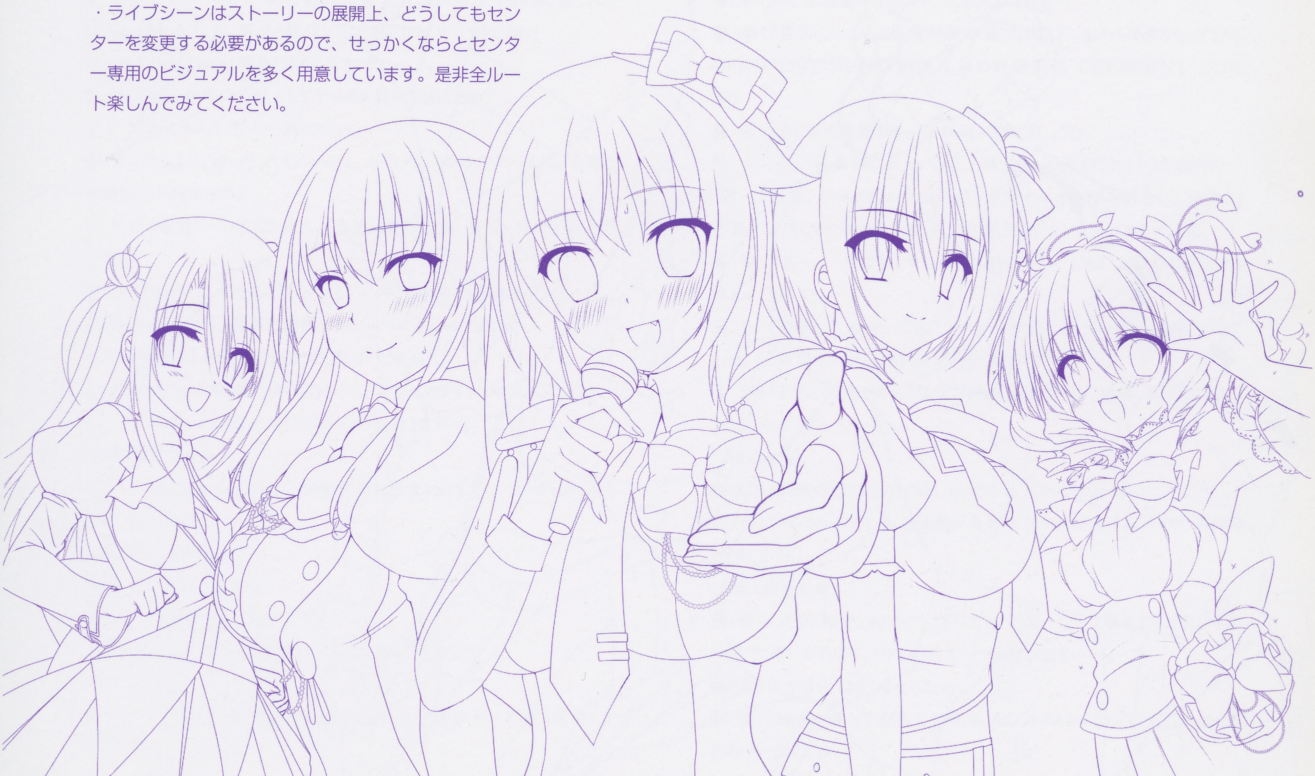
・発表初期のメインビジュアルです。原画陣3名の特徴を崩さないように注意をして制作を進めました。また、多くの反応を頂きました。







・ライブシーンはストーリーの展開上、どうしてもセンターを変更する必要があるので、せっかくならとセンター専用のビジュアルを多く用意しています。是非全ルート楽しんでみてください。



トップアイドルを目指すチームリーダー

赤崎 希望 あかさき のぞみ

身長：163cm
3size：B90/W59/H88
Type：明るい／意地っ張り／負けず嫌い
CV:佐倉もも花
キャラクターデザイン：たにはらなつき

・ゲーム上ではセンターポジションなヒロインなので多くのCGを用意しました。彼女の厳しさは向上心のあらわれなので、あきらめずに一緒についていってください。

STAFF COMMENT



「あたしは赤崎希望。これからよろしくね」



・努力家で頑張り屋の愛奈は体験版をやった方から多くの反響を頂きました。ひたむきで一生懸命なヒロインを一緒に応援してあげてください。

STAFF COMMENT

「あっ、黄泉川愛奈です。一生懸命、がんばりますっ」

気弱さを克服したい努力娘

黄泉川愛奈 よみかわ まな

身長：152cm

3size：B85/W53/H84

Type：頑張り屋／気が弱い／優しい

CV：西乃ころね

キャラクターデザイン：蜜桃まむ

ハラペコで気分屋のムードメーカー

橙野 純 とうの じゅん

身長：164cm
3size：B92/W58/H89
Type：元気／ボーイッシュ／面倒くさがり
CV:朝香ナツ
キャラクターデザイン：千翔



「ちわーっす。アタシ橙野純！
まっ、仲良くしよっ」

・いつも元気なチームのムードメーカーです。はつらつとした明るさで楽しげな雰囲気を引っ張っていきます。でも彼女なりの悩みもあるので、是非にセンターへ選んであげてくださいね。

STAFF COMMENT



・外見はクールですが、内面は非常に優しくて気遣いのある立派なレディです。彼女のストーリーは他のヒロインとは少し違った展開になるので、彼女の意外な一面も楽しんでください。

STAFF COMMENT

「私、津嘉田翠よ。よろしくね、マネージャー」

フェミに憧れるクールビューティー

津嘉田 翠 つかだ みどり

身長：168cm
3size：B88/W60/H91
Type：クール／仲間思い／実は可愛いもの好き
CV：葉市憂
キャラクターデザイン：たにはらなつき

・藍華はクレッセントのメンバーでは最もポテンシャルが高いキャラです。旧家の家元という事で世間ズレしたしぐさも可愛らしいので。軟らかな流れを楽しんでください。開発スタッフでの人気は彼女が一番でした。

STAFF COMMENT





「水無瀬藍華と申します。
何でも仰ってくださいね」

やわらかな風を纏った撫子

水無瀬 藍華 みなせ あいか

身長：166cm
3size：B95/W62/H99
Type：清楚可憐／世話焼き／芯が強い
CV：橘まお
キャラクターデザイン：千翔







・ライバルユニットであるトライスターは既に学園トップの地位を持って登場します。希望のライバルである智恵理のデザインは直球的なキングキャラとしてお願いしました。自信のある顔つきがたまらないですよね。

STAFF COMMENT

・本作の立ちキャラはパーツごとに作画して頂き、別々に着色しています。ゲーム中でもそれぞれのパーツを組み合わせて表示をしています。見えないですけどね。



「黒田智恵理よ。アナタウチのコにならない?」

描きおろしノベル台本

料理は愛情!純情?ときどき友情!?

作：JUN

//SE：教室のドアの開く音

裕　一：「ちょっとみんな、聞いて欲しいんだ……困ったことが起きちゃってさ」

希　望：「どうしたのよ、中原。今からライブイベントのリハーサルでしょ。困ったことって……なんか、イヤな予感がするわね」

純　：「まさか、ステージの予約が取れてなかったとか？」

希　望：「だったら許さないわよ、中原っ!! イベント前に手違いだなんて、それでもあんた、あたしたちのマネージャーなの!?」

裕　一：「そ、そうじゃないんだ。今度のライブイベント、急遽内容が変っちゃってさ……」

希　望：「はぁ？ なによ、それ……」

翠　：「内容の変更って……セットリストの変更とか？」

愛　奈：「そうなの？ だったら今から考え直さなきゃダメだよね？ ああ、どうしよっ」

裕　一：「焦らないで、愛奈ちゃん。そうでもないんだ。ちょっと言いにくいんだけど……」

希　望：「つべこべ言わず、ちゃんと言いなさいよ、中原」

裕　一：「わかったよ、希望……今回は歌のパフォーマンスは無しになっちゃったんだ」

藍　華：「歌のパフォーマンスが無し……ですか？ でしたら私たち、今日は一体何をすればいいんですか、中原さん？」

裕　一：「うん、それがね……ほんと、言いにくいんだけど……」

純　：「わかった！ イベント関係者を招いて、怪しい接待とかさせられちゃうんだ」

裕　一：「違うって、純。イベント関係者を招いて、接待するっていうのは合ってるんだけど、怪しい接待じゃなくて……」

純　：「いっ、イヤらしい接待!?」

※上記、大きめの声でお願いします

裕　一：「なっ!?」

愛　奈：「い、イヤらしい接待って……純ちゃん、わたしたち何をするの？」

純　：「そ、そりゃ、決まってんじゃん……アタシたちがステージに上がったとたん、ピンクのスモーク焚かれてさ……」

愛　奈：「ピンクのスモーク!?」

翠　：「や、やめてよ……私たち、ピンクのスモークのなかでパフォーマンスするために、頑張ってきたワケじゃないのよ!」

藍　華：「私、皆さんの仰ってること、よく分かりませんが……でも、とても怪しいのはわかります……ああ、不安です」

希　望：「やっぱりこの業界、一筋縄ではいかないのね……とてもとても辛いけど、今からポールダンスの練習をしなきゃダメってことよね」

愛　奈：「ポ、ポールダンス!?」

純　：「ひゃあぁぁ……やらしい、やらしいよぉ! スケスケ下着で、ポールに巻きついて、グルグル回るんだよね!!」

裕　一：「ちょっ、ちょとみんな、ストップストップっ!! 発想がすごく古臭いってのは置いておいて、そんな卑猥なことしろなんて、誰も言ってないよっ」

希　望：「じゃあ、なんなの。あたしたちに言いにくいことって結局、どういう内容なのよ?」

裕　一：「それがさ……料理対決になったんだ、今回のイベント……」

ヒロイン全員：「えぇっ、料理対決〜!?」

裕　一：「うん……それでもしも優勝したら、ローカル局だけど、小さいコーナーを担当させてもらえる可能性があるんだ」

ヒロイン全員：「ふーん……」

※不機嫌にうなずく

裕　一：「最近のアイドルは、バラエティにも富んでいたほうがいいって話で……って、なんでみんな急に不機嫌になったの?」

希　望：「だって……中原、別に料理対決なんて、どうってことないのに、あたしたちに伝えづらかったって……意味わかんないわ」

翠　：「そうね、なんだか舐められた発言よね。マネージャーはまるで私たちが、料理できないって言いたいみたいだけど」

裕　一：「あっ、いや、まあ……」

愛　奈：「わたしたち、女の子だよ。料理くらい普通にできるのに……中原君、ひどぉい」

裕　一：「ご、ごめんね。みんなの腕前がどれくらいなのか、分からなかったから……ハハハッ」

藍　華：「でしたら今日、私たちの腕前を見せつけてあげましょう」

純　：「いぇ〜い! 家庭科の授業以来の料理♪ 腕が鳴る〜!」

裕　一：「えっ……それ、何年ぶりなんだか……」

希　望：「……で、中原。これからあたしたち、どうすればいいの??」

裕　一：「あっ、実はさ、さっそく今からの時間、料理の練習に充ててもいいって」

翠　：「へぇ……もしかして、調理室みたいなのがあるの?」

裕　一：「うん、今から案内するよ。Tristerが使ってる部屋の隣なんだけど……」

希　望：「げっ! 智恵理たちと、隣同士なの??」

裕　一：「うん、今回の一回戦の相手も、実はTristerなんだ……リハのつもりで練習してほしいって、加藤先生から言われたんだよ」

希　望：「ふーん……それを聞いたからには、やるしかないわね。なんか燃えてきたわ!」

純　：「だーいじょうぶ。張り切らなくても、アタシらが負けるわけないって」

翠　：「そうね。歌とダンスでも余裕だけど、料理でも余裕のところ、見せてあげましょうよ」

藍　華：「そうですね……でも皆さんと料理なんて、それだけでも楽しみです」

裕　一：「そっか……よしっ、いけそうだね。じゃあ部屋に移動しようか。みんな、頑張ろうね」

ヒロイン全員：「もちろん!」

希　望：「ちょっと、あれどこ？ あれ……」

翠　：「あれってなによ、希望」

希　望：「ほら、野菜の皮を剥くヤツ! 包丁じゃ、めんどくさいから」

翠　：「あぁ、ピーラーのことね。でも見当たらないわね。仕方無いから、包丁で頑張りましょう」

希　望：「えぇ〜っ、仕方ないわねぇ……んしょっ」

翠　：「ちょっ!! 希望、そんな持ち方したら危ないわよっ!!」

希　望：「大丈夫よ。あたし美術で彫刻刀使うの、結構得意だったし〜♪」

翠　：「彫刻刀？ うーん、なんか違うような……野菜の皮は私が剥くから、希望は野菜を適当な大きさに切ってくれる?」

希　望：「うん、了解。切るのは得意なのよ、任せて!」

//SE：グサッ! トンッ! トンッ!!（かなり力強く包丁で野菜を切る音）

裕　一：「うわっ! 希望、大丈夫なの!? 見ててすっごく、ハラハラするんだけど……」

希　望：「何よ、中原。いちいち大げさなのよ。ちゃんと切ってるじゃない」

裕　一：「き、切ってるけど……アグレッシブというか……」

希　望：「もう、男子厨房に入るべからずよ！ はい、どいたどいた！」

裕　一：「うわぁ、もう…………はぁ、心配だよ」

裕　一：「手始めに、カレーを作るってことになっているけど……最初っから怪しい雰囲気だぞ、これ」

裕　一：「やっぱり僕の思ってた通り、CRESCENTのみんなって、料理は苦手なんじゃないか？」

愛　奈：「藍華ちゃん、ポテトサラダに隠し味、入れてもいいかな？」

藍　華：「えぇ、かまいませんけど……一体、何を入れるんですか、愛奈さん？」

愛　奈：「えっとね、お砂糖だよ。味がちょっとまろやかになって、すごく美味しくなるの！」

藍　華：「まあ、それは知りませんでした。ではどうぞ、お砂糖を入れてみてください」

愛　奈：「うん。隠し味って大事だよね～♪」

//SE：ズサササササッ!!（砂糖が大量に袋から流れ落ちる音）

裕　一：「えぇえっ!?」

藍　華：「あ、あの、愛奈さん……これはちょっと、入れすぎではありませんか？」

愛　奈：「そんなことないよ。わたし、これくらいが好きなんだ♪ はむ、もぐっ……うん、ちょうどいい感じ！」

純　：「うえぇ、愛奈、そのサラダの味、ヤバイことになってんじゃないの？」

愛　奈：「そんなことないよぉ。ほら純ちゃん、食べてみて？」

純　：「う、うん、じゃあ一口だけ……はむっ……おおおっ?? これ、結構平気だね！」

愛　奈：「えへへっ……でしょ！ ちょっと甘酸っぱい感じだけど、美味しいよね？」

純　：「うん。この前食べた『ハラペーニョ&バーベキューソース&チェダーチーズバーガー』のインパクトに比べたら、こっちの方が全然イケてるよ」

裕　一：「なんだよ、そのやばそうなハンバーガーは……」

純　：「ユウ君、そんな心配そうな顔しなくても大丈夫。こっちはすこぶる順調だよ♪」

裕　一：「順調……なのか？ 本当に順調なら、いいんだけど……」

藍　華：「愛奈さん、私も少し味見していいですか？」

愛　奈：「もちろんだよ！ はい、どうぞ」

藍　華：「では、いただきます……はむぅ、んんんんっ!?」

裕　一：「うわぁ、藍華さん、大丈夫？」

藍　華：「うっ……ケホッ、ケホッ……わ、私にはこれは、少し甘く感じられますが……もう少しマヨネーズを濃くした方が良いかと思います」

愛　奈：「うーん……そうかなぁ??」

純　：「藍華はお嬢様だから、仕方ないよ。ポテチとかハンバーガーとか、ジャンクフード系はあんまり食べないでしょ？」

藍　華：「はい、確かに……」

純　：「アタシなんか週4はハンバーガー食べてるから、濃い味付けもけっこう平気だったりするよ」

裕　一：「それって純がジャンクフード食べすぎで、舌が麻痺しているんじゃないの？」

純　：「んんっ？ ユウ君、今サラッと酷いこと言った！ アタシの舌、麻痺なんかしてないよ。ユウ君も味見したら分かるって」

裕　一：「い、いいよ、僕は遠慮しておくから……ははは っ」

純　：「そう？ けっこうイケるのになぁ……」

裕　一：「僕はとりあえず、みんなを見守ってるから……ふぅ……」

裕　一：（危ない危ない……なんか藍華さんと翠以外、料理は全然ダメみたいだぞ）

CRESCENT.

裕　一：「やっぱり僕の予想通りだったな……こんなことで、料理対決なんかできるのかなぁ……」

希　望：「ねぇ、みんな……ちょっといい？」

愛　奈：「どうしたの、希望ちゃん？」

希　望：「隣り……気にならない？」

翠　：「隣りって……あっ、Tristerのこと？」

希　望：「そうそう。まっ、智恵理たちがどんな料理を作ろうが、これっぽっちも脅威じゃないけど……一応、敵情視察はしとくべきじゃない？」

藍　華：「そうですね。私たちはカレーを作ることにしましたが、Tristerの皆さんのメニューを参考にして、再度検討しても良いかもしれません」

純　：「そーだね。まっ、あのバカ美和たちはおにぎりすら、まともに作れないかもしれないけど」

希　望：「そうね、戦いの前に鼻で笑ってやりましょう！ 中原、Tristerの部屋に案内してよ」

裕　一：「うん、かまわないけど……でもあんまり、騒がないようにね」

希　望：「何言ってんの、ただ見るだけよ。じゃあみんな、行きましょ！」

純　：「いぇ～いっ。レッツゴー♪」

//場面転換

//SE：ドアの開く音

裕　一：「おおっ……なんか黒田さんたち、すごいぞ」

希　望：「ちょっと、中原。あたしにも見せなさいよっ！」

裕　一：「ま、待って、押さないで…」

希　望：「なっ、なに、あれ！ なんで他の学科の先生まで、集まってるの!?」

智恵理：「先生方、さぁ、召し上がってください。こちらシュリンプカクテルと、摘みたてルッコラのサラダです」

美　和：「そして！ 特製キャロットスープに舌平目のムニエルで～す」

美　羽：「デザートには、三種のソルベをご用意いたしました」

講　師：「おおっ、すごいぞ……まるでプロのような盛り付けだ」

講　師：「どれどれ、お味は……ぱく、もぐもぐ……うん、実に美味いっ!!」

智恵理：「うふふっ……ありがとうございます♪」

希　望：「なによ、なんかおかしくない？ なんでこんなに準備がいいのよっ！ 調理器具だって、あたしたちより豪華だし」

藍　華：「あのソルベマシーン……ご家庭用ではなくて、お店とかで使うタイプですね」

純　：「ソルベ?? なにそれ、食べたこと無いよーっ」

翠　：「シャーベットのことよ。それにしてもあれ、目玉が飛び出るくらい高価なはずよ……おそらく、40万近いんじゃ」

愛　奈：「よ、よ、40万!? シャーベット作るだけの機械が、そんなにするなんて……」

希　望：「っていうか、いちいち鼻につくメニューばっか！ ふんっ、何が摘みたてルッコラ……スーパーのやつに決まってるのに」

純　：「ねぇねぇ、ユウ君。こっちも智恵理たちが使ってるマシーン、持ってこようよ。その方がぜったい便利だよねっ！」

裕　一：「うーん……そうだね。でもああいうの、ウチにあったかなぁ……」

純　：「そうじゃなくて、お店で使うようなすごいアレだよ～」

裕　一：「ムチャ言うなって……でも黒田さんたち、まるでプロ級だなぁ。正直驚いたよ」

希　望：「なにトボケたこと言ってるのっ！ 料理は愛情よ！」

裕　一：「希望の口からそんな言葉が出るなんて、驚きだな」

希　望：「こうなったらあたしたち、カレーを極めるわよっ！ あんな形ばっかの料理じゃなくて、温もりの感じられる、とっても家庭的なヤツ！」

智恵理：「ん……あら、CRECENTのみなさん。そんなとこで覗き見してないで、こっちに来たらいいじゃない」

希　望：「げっ、気づかれたか……」

裕　一：「そりゃ、気づくよ。僕たち結構、大きな声で騒いでたし」

美　和：「おーい、何コソコソなにやってんだ。美和たちのコース料理見て、腰抜かしたんだろ！」

美　羽：「ふふふっ、丸腰のCRESENTの皆さん。覗き見だけでは、美羽たちのテクニックを盗めませんよ」

純　：「むっかーっ！ 何浮かれたこと言ってんだよ、どーせこんなの、見た目だけのクセに！」

智恵理：「あら、そこまで言うなら、味見だけでもしていきなさいよ。私たちは構わないわ」

希　望：「あっそ。じゃああたしたちが、率直で厳しい意見を述べてあげるわ」

智恵理：「ふふっ、味音痴の希望に、まともな感想が言えるかどうか怪しいけど……」

希　望：「誰が味音痴ですって!? ふざけないで……仕方ないから、手始めにサラダを食べてあげるわ……もぐもぐ」

愛　奈：「じゃあわたし、キャロットスープいただきま～す！ はむ、もぐ……わぁっ、これ美味しい！ でももっと、甘い方が好みかなぁ」

希　望：「なによこれ、もっとドレッシングを酸っぱくしなさいよ。味がよく分かんないわ……やっぱ味音痴は智恵理よね、もぐもぐ……」

智恵理：「フン、そう言いながら、思いっきり食べてるじゃない、希望。素直に美味しいって言えばいいのに」

希　望：「なにバカなこと言ってんのよ。もぐもぐ、ぱく……」

純　：「むぐむぐ……このエビの固まり、なんか淡白すぎるよ。コッテリアのエビカツバーガーみたいにさ、もっとワイルド感ほしーよ」

美　和：「エビの固まりじゃない！ カクテルシュリンプだよっ!! アホ純にはこの上品さ、伝わんらないんだなっ！」

純　：「バカ美和のクセに、なにがカクテルシュリンプだ。上品ぶってても、エビはエビじゃん！」

美　和：「言ったなぁ、アホ純っ!! このエビは市場に行って、わざわざ仕入れてきたんだぞっ！」

翠　：「あら、ムニエルはとても美味しいわ……Tristerも意外とやるわねぇ」

藍　華：「このソルベも、食後のデザートにはピッタリですね。マンゴー味が、私は好みです」

裕　一：「おいおい……みんな一口どころか、完食しそうな勢いだぞ……」

//SE：5人が食べつづける音

裕　一：「しかしこの様子じゃ、僕たちがTristerと勝負するのは厳しそうだ……料理の腕が違いすぎる」

美　羽：「どうやらCRESCENTには、津嘉田さんと水無瀬さん以外、正常な味覚の持ち主はいないのですね」

純　：「ぱくぱく、もぐ……なんだとぉ！」

美　羽：「ああ……レベルが違いすぎて、張り合う気も失せます」

智恵理：「そうね、美羽の言う通りね。CRESCENTは何を作るのか知らないけれど、今回の料理バトル、私たちの優勝に決まったわ」

希　望：「はあ？ 勝手なこと言わないでくれる！ あたしたちだって、メニューはもう決まってるんだから」

智恵理：「あら、そうなの？ 一応聞いておいてあげるわ。さぞ手の込んだ料理を考えているんでしょうけど……ふふっ」

希　望：「……カレーよ」

智恵理：「何よ、それ。普通すぎるわ。家庭科の授業じゃないんだから」

希　望：「いえ、ただのカレーじゃないわ。スパイスから調合して煮込んだ、通も唸ってしまう本格カレーよ!!」

裕　一：「えぇっ!? 家庭的な、愛情いっぱいのカレーを目指していたんじゃないの？」

希　望：「もう、中原は黙ってて！ あんたたちの料理、味見させてもらったけど、正直負ける気がしないわ……ご愁傷さま」

智恵理：「ふふっ、そこまで言うなら、当日を楽しみにしてるわ。くれぐれも鍋を焦がさないようにね、CRESCENTの皆さん」

希　望：「智恵理こそ、調子に乗ってソルベマシーン壊さないでねっ！ じゃあみんな、行くわよっ！」

愛　奈：「あっ、希望ちゃん待って！ えっと、その……ごちそうさまでした～」

純　：「アタシ、やっぱエビカツの方がいーと思うよ、美和。じゃーね！」

翠　：「本格カレーを作るって……希望、本気で言ってるのかしら……」

藍　華：「翠、とりあえず部屋を出ましょう。皆さん、失礼します」

裕　一：「じゃ、じゃあ、僕たちはこれで……」

智恵理：「中原君、アナタ相変わらず苦労してるわね。辛かったら、いつでもこっちにいらっしゃい。待ってるから……ふふっ」

裕　一：「えっ、いや、僕は……」

希　望：「中原、なにしてんのよ！ さっさと行くわよっ」

裕　一：「いててっ！ 希望、腕引っ張るなって！」

//SE：ドアを閉める音

//場面転換

希　望：「……じゃあみんな、作戦会議よ。もう後にはひけないわ」

愛　奈：「希望ちゃん、さっきスパイスから調合するって言ってたけど……そんなことできるの？」

希　望：「もちろん、やったことないわ！」

裕　一：「……やっぱりな」

希　望：「でも、やるのよっ！」

愛　奈：「ふぇえっ!? 大丈夫なの？ わたしたち、お料理久々でぎこちないし……黒田さんたちの料理を見て、圧倒されたっていうか」

純　：「そうそう。料理のブランクがあるから、急にはできないよね。2、3日あれば、そこそこスムーズに包丁も使えるんだろうけど……」

裕　一：「あのさ、純の料理ブランクって、学生の頃の家庭科の授業以来だろ？」

純　：「んっ……ユウ君、なんか言った？」

裕　一：「いや、なんでもないよ。それよりさ、ちゃんと考えようよ」

希　望：「ちゃんとって……何よ、中原。マネージャー的に良い案でもあるの？」

裕　一：「今はみんなでとにかく、力を合わせないとダメだと思うんだ。そうだなぁ……料理の指揮を、誰かに執ってもらうべきだな」

希　望：「指揮？ リーダーだったら、あたしが……」

裕　一：「……そうだ、藍華さんがいいよ！」

藍　華：「わ、私……ですか？」

裕　一：「うん。メンバーへの作業分担や段取り、考えてくれないかなな」

藍　華：「私がそこまで、仕切っても良いのですか？」

裕　一：「お願いするよ」

藍　華：「はい、頑張ります！」

裕　一：「ありがとう、助かるよ！ じゃあ、翠には他のメンバーのサポートに回ってほ

しいんだ」
翠：「サポートね……ええ、問題ないわ」
裕一：「よし。じゃああらためて、レシピを考え直そうか。希望、メインは本格カレーで決定なのかな?」
希望：「もちろんよ! 中原だって、智恵理たちの料理見たでしょ……少しは手の込んだものじゃないと、勝ち目ないわ」
裕一：「だよなぁ……ここは一つ、みんなの力を信じてみるか」
愛奈：「あのっ、提案してもいいですか?」
裕一：「なにかな、愛奈ちゃん?」
愛奈：「わたし、デザートも作りたいかも」
翠：「デザートか……たしかにTristerは前菜からデザートまで、ちゃんと考えていたものね」
純：「でもさ、カレーのあとに食べたいデザートってなんだろ? ケーキ??」
翠：「純、ケーキはないでしょ。ただでさえ、カレーって味が濃いのに……」
純：「そう? 辛いもん食べたあと、生クリームで口のなかをまろやかにするのって、けっこう快感だよ」
翠：「う、うーん……私には無理ね」
愛奈：「じゃあさ、アイスクリームはどうかな?」
希望：「それいいわね、愛奈。カレーの後のアイスクリームって最高よねっ!」
愛奈：「えへっ……そうだよね! じゃあ、アイスクリームに決定♪」
藍華：「でもアイスクリームを作るのって、少し手間じゃないですか?」
愛奈：「大丈夫だよ。実はお家に、アイスクリームメーカーがあるの。黒田さんたちが持ってるような、業務用ではないけど……」
希望：「普通は家庭用の可愛いマシーンを使うのよ。アイツらが大げさなのよ」
愛奈：「じゃあアイスクリームメーカーと、材料そろえて持ってくるね。時々自分で作るから、当日は一人でもパパッとできちゃうよ♪」
裕一：「よし、デザートは決定だね。あとはサラダと、本格カレーの作り方を調べないと……」
藍華：「それなら私が、当日までにレシピを作ってきます。ぶっつけ本番でもうまくいくよう、考えてきますから」
裕一：「藍華さん……そこまでお願いしちゃって、いいのかな?」
藍華：「はい! 私に任せてください……Tristerの皆さんを、あっと言わせましょうね!」
希望：「すごいわ、今回の藍華、なんて頼もしいの!!」
愛奈：「カッコイイよ、藍華ちゃん。ホレボレしちゃうよぉ」
翠：「さすが藍華、料理は得意分野だものね……期待しているわ」
純：「藍華の底力、Tristerに見せつけてやろーね!」
藍華：「皆さんのお言葉、嬉しいです。でも当日は、全員の力を合わせなきゃいけません……どうぞよろしくお願いします」
希望：「もっちろん! みんな、料理バトル、勝ちに行くわよ!」
ヒロイン全員：「オーーーーッ!」
裕一：「よし、この調子ならなんとか、うまくいきそうだな……あとは運任せか」
//場面転換
//SE：スズメの鳴き声
裕一：「ああ、ついに勝負の日か……みんなもう、集まってるかな」
聖子：「中原クン、おはよう。今日も早いのね」
裕一：「あっ、加藤先生。おはようございます」
聖子：「いよいよ料理対決、本番ね。そっちはうまくいきそう?」
裕一：「水無瀬さんが先頭きって、やってくれるんです。多分、問題ないと思います」
聖子：「そう……なら安心ね。あたしは審査員として参加するから、楽しみだわ。それに寺山クンが、司会を担当してくれるのよねぇ……助かるわ」
裕一：「えっ? カズが司会をするんですか!!」
聖子：「あら、中原クン。もしかしてヤキモチ焼いてくれてるの?」
裕一：「えっ、あっ、いや……別に……」
聖子：「うふふっ、妬いてくれていいのよ。寺山クンには司会のお礼に、今度ご飯連れていく約束なの」
裕一：「なるほど……カズのヤツ、ご褒美に釣られたな。今頃、張り切ってんだろーな」
聖子：「だ・か・ら、ヤキモチ妬かなくていいのよ。中原クンも寺山クンと一緒に司会をやってくれたら、食事に招待するわ……んふふっ、どぉ?」
裕一：「ちょ、ちょっと近づきすぎです、聖子先生っ!」
聖子：「うふふっ、顔を真っ赤にしちゃって、本当にカワイイわね」
裕一：「か、からかうのは止めてください、僕もう行きますっ!」
//SE：駆け足の音
裕一：「はぁ、はぁ……まったく、加藤先生は相変わらずだな。つーか、早くみんなと合流しないと」
//SE：ドアの開く音
裕一：「みんな、おはよう!」
愛奈：「中原君、おはよう♪」
純：「あれ、ユウ君、すっごく汗かいてるよ。走ってきたの?」
裕一：「まあね……ハハハッ」
希望：「さて、これで全員そろったわね。それじゃ今日仕切ってくれる藍華に、一言お願いしようかしら」
藍華：「はい、喜んで!」
希望：「い、居酒屋みたいね……じゃあ、お願い」
藍華：「皆さん、いよいよ料理対決本番となりました。私たちは今から、アイドルCRESCENTではなくて、新進気鋭の料理集団“CRESCENT”となります!」
藍華：「高いプロ意識を持って、料理に臨みましょう!!」
裕一：「わぁ、藍華さん、目がいつもより輝いて……なんだかキャラが違う!?」
翠：「藍華、今日のためにわざわざ、オリジナルスパイスを調合してきたのよ。本番までに何度も試作品を作って、納得した味らしいから、期待大よね」
藍華：「はい……実は私、今日は寝ておりません!! でもとても清々しい気分を味わっています!」
裕一：「徹夜して、頑張ってくれたのか……それでランナーズハイ状態なんだ。えっと、もう時間だから、会場の前まで行こうか」
希望：「そうね……じゃあみんな、円陣組むわよ。絶対に優勝、狙いましょう!」
ヒロイン全員：「おーーっ!!」
//場面転換
※以下、和俊のセリフはマイク通しているので、エコーがかかるようにしてください。
和俊：「みなさーーん! 本日は我が美音学園のアイドルグループが、料理でバトルします!!」
//SE：拍手の音
和俊：「大きな拍手、ありがとうございます。本日、司会を務めますは私、寺山和俊でございます。さて、バトルの前に一つだけ小話を……」
観客：「いいから、はやく進めろよー」
和俊：「まぁまぁ、待ってください。全然関係のない話をするわけではございませんので……コホン」

和　俊：「実は私、とても気になる女性と、今度食事をすることになりまして。実はこの対決が、ご縁だったりするのですが……へへへっ」
和　俊：「ぶっちゃけ、期待してもいいのかなーって。いやだって、焼肉食べ放題ですよ。『えっ、肉食系ですか？』みたいな！　もうそれって、GOサインみたいな？」
観　客：「全然、対決と関係ねーじゃねーか！」
観　客：「もうお前、どっかいけよーー」
和　俊：「おやおや、嫉妬されてますね、皆さん。でも俺はつい最近まで、そっち側の人間だったので、お気持ちは分かりますよ」
※下の聖子のセリフは小声でお願いします。
聖　子：「ちょっと寺山クン、何してるの!?　時間おしてるわよっ」
和　俊：「ハッ！　聖子先生、すいませんっ!!　じゃあ、えっと……一回戦はTristerとCRESCENTですね。ではバトル、開始しますっ!!」
希　望：「寺山ったら、何はしゃいでんのかしら……」
藍　華：「皆さん、対決はもう始まってますよ。作業に集中しましょう」
希　望：「あっ、本当だ。智恵理たち、もう野菜切ってるし」
藍　華：「さて、カレーを作りますよ。今回はそれほど時間をかけなくても、プロ並みの仕上がりになるよう、考えてきましたから」
純　：「ひゃー、藍華、本当にすごいねぇ。何種類スパイス入ってんだって？」
翠　：「ちょっと純、こっちはサラダに取りかかるわよ」
純　：「はいはい、りょーかい♪」
翠　：「愛奈、一人でデザート作るの、本当に大丈夫？」
愛　奈：「翠ちゃん、任せといて。今日のためにおいしいお砂糖と新鮮な卵、持ってきたから♪」
翠　：「そっか。じゃあこっちは、料理のほうに集中するから、お願いね」
愛　奈：「はーい！」

裕　一：「みんな順調そうだな……これならきっと、いい感じのカレーが作れそうだ」
裕　一：「Tristerは相変わらず、豪華なコース料理だけど、こっちも負けちゃいないぞ……頑張れ、みんな！」
//時間経過
和　俊：「……はい、ここまで!!」
希　望：「はぁ、はぁ、はぁ……できたわ」
智恵理：「こっちも完成よ……ふふっ、完璧ね」
和　俊：「さて、両者の料理が出揃いました。まずは先行である、CRESCENTの料理から試食です」
審査員：「おぉ、これはなかなか本格的なカレーだな。サラダも美味いし……」
審査員：「ええ、好感触ですね。じゃあこのアイスクリームも、きっと美味しいでしょうね」
和　俊：「おおっ、審査員の皆さん、笑顔です！　これは期待できるか……？」
審査員：「もぐ……んぐぅぅぅっ?!」
審査員：「なんだ、このアイスっ！　ぐふぅっ!!!」
//SE：騒然としているようなガヤがあれば、お願いします。
和　俊：「えっ、あれ？　これはどういうことでしょうか。皆さん、突然顔色が……」
裕　一：「なっ、なんだ？　なにがあったんだ？　おいっ、みんな！」
愛　奈：「あっ、中原君っ…!!　わたし、やっちゃたよう」
裕　一：「やってしまったって……材料が腐ってたとか？」
希　望：「そうじゃないの。愛奈の持ってきた砂糖というか、人工甘味料がすごい濃度で入ってたみたいで……」
裕　一：「じ、人工甘味料!?　なんでまた……」

CRESCENT.

愛　奈：「ネットで買ったんだけど、砂糖よりローカロリーって書いてあったから、つい欲張ってレシピの倍の量、入れちゃったの……甘い方が美味しいと思って」
裕　一：「そ、それは、甘党もビックリだね……ハハハッ」
純　：「ユウ君、味見する？　アタシはギリギリ、完食できるけど……」
裕　一：「いや、審査員が退場してるのを見る限り、その勇気はないよ」
愛　奈：「うわぁぁんっ！　みんな、ごめんなさいぃっ。わたしほんと、バカだよぉ」
藍　華：「愛奈さん、泣かないでください。ワザとじゃないんですから」
愛　奈：「でも、でもぉ……」
翠　：「私たち、愛奈のこと責めたりしないわ。顔を上げて」
愛　奈：「う、うん……あっ、黒田さんっ！」
智恵理：「あなたたち、これはどういう事よ？　わざと試合が中止になるよう、仕向けたわけ？」
愛　奈：「はうぅっ……そんなぁ」
希　望：「そんなわけないでしょ、智恵理！　バカこいてんじゃないわよっ」
美　羽：「どうでしょうね……美羽たちに負けるのがイヤで、わざと審査員を潰しにかかったようにしか思えませんけど」
美　和：「この根性なし！　ビビリ！　せっかく美和たちの料理、完璧だったのにぃ！」
純　：「なんだと、このバカ美和！　わざとじゃないって言ってんのに!!」
美　和：「どーだか！　まっ、小細工なんかなくても、カレーごときに負ける気はなかったけど」
藍　華：「……ちょっと、今『カレーごとき』とおっしゃいましたか？」
※上記、いつもの藍華らしくない怒気と迫力でお願いします。
美　和：「ひっ、ひぃぃっ!!　なんか怖いんですけど……」
藍　華：「私、普段は怒りませんけど……今だけはかなり、腹が立ってます」
裕　一：「ちょっ、みんな！　落ち着いて！　とりあえず冷静になろうよ、ね？」

希　望：「もう、中原は黙ってて!!」
翠　：「そうよっ！　なんで私たち、卑怯者扱いされるわけ？」
裕　一：「で、でもさ……」
希　望：「今日こそ、ケリつけるわよ！」
智恵理：「フン、望むところよ、希望」
//SE：大乱闘の感じで、ヒロイン達の罵声が入っても良いかも。
愛　奈：「あぁん、みんな止めてぇ！　わたしのせいなの、ごめんなさぁい!!」
裕　一：「う、うわぁ……ヤバイよ、先生の助け、借りないと……」
聖　子：「……中原クン」
裕　一：「加藤先生、ちょうどいいところに！」
聖　子：「今回の不始末、始末書の代わりに反省文で30枚、提出してね♪」
裕　一：「これ、僕の責任!?　そ、そんなぁぁぁっ……うぅっ、しくしく」
愛　奈：「ほんとにみんな、ごめんなさぁぁい!!」
//フェードアウト
（終了）



オープニング SONG

Let's JAM

作詞曲/Woozie McMahon
編曲/QUERUX
歌：CRESCENT

奇跡って本当にあるんだよって
気づかせてくれた
それはいつも隣にいてくれたから

走り出した 勇気振り絞って
不安でいっぱいだったけど
大切な宝物握りしめて (無くさないように)
伝えたいんだ 未来へ届けるために

さぁ行こうよ　夢の世界へ
思いをひとつに 迷いも困難も
それは運命だから
涙流した悔しさ忘れないで
LOVE&SMILE 胸に抱いて

ずっとずっと 変わらないよ
ひとりじゃないよ 一緒だよ
この想い　届け　Let's jam !!

見上げればいつもと変わらない空
そんな毎日が幸せっていうのかな

これからも手を繋いで強く（離さないよ）
照らしゆく光は（私たちだけのモノだよ）
何度打ちのめされても（希望信じて）
今・この瞬間を大切にしよう

翼広げて どこまでも遠く
果てしなくもっと遠く 飛んでいけ
声は降り注ぐ雨となり
音色は虹に変わり架け橋となる

さぁ行こうよ　夢の世界へ
思いをひとつに 迷いも困難も
それは運命だから
涙流した悔しさ忘れないで
LOVE&SMILE 胸に抱いて

ずっとずっと 変わらないよ
ひとりじゃないよ 一緒だよ

この想い　届け
この声よ　届け

Let's jam !!

劇中使用曲ボーカルバージョン

Magical Rainbow

作詞曲/Woozie McMahon
編曲/QUERUX
歌：CRESCENT

君と夢に見ていた六色（ろくしょく）の虹を描いたんだ
ほら、行くよ。目を開けて、空を見上げて

雲ひとつない青空にどこまでも続く
それぞれの願いで彩るキャンバス
ずーっと消えない様に　魔法をかけよう
どうかお願い…叶います様に

空の涙の後で世界は微笑んでいた (その笑顔忘れないように)
欠けた月は　やがて環（えん）になるよ
明日を信じてみようよ

一人で描いた　虹はモノクロで
鮮やかな光　ずっと憧れていた

知らないことに　戸惑いながら
自分の気持ち見えなくなってた時も
胸をはって進もうって思えた
君がいたから

Nothing can force me to give it up.
いつだって忘れないように
虹色に世界を染めてしまおう

Nothing can force me to give it up.
夢は夢じゃないから
どこまでも羽ばたく鳥になるんだ

青空のステージへ
振り返ることは無いよ
（そうだ、前を見てただ想うだけで）

深呼吸して前だけを向いて
新しい色の空　瞳に光る

Nothing can force me to give it up.
いつだって忘れないように
虹色に世界を染めてしまおう

Nothing can force me to give it up.
夢はここにあるから
どこまでも光を届けに行こう

ここからがスタートさ
振り返ることは無いよ
（ずっと、隣には君がいるからね）

虹の向こうへずっと向こう側へ
新しいストーリー　はじめようよ



すたーらいと☆アイドル COLORFUL TOP STAGE!

2014 クレッセント ライブツアーパンフレット
2014 CRESCENT LIVE TOUR

【奥付】
2014 クレッセント
ライブツアーパンフレット
発行日：2014年10月24日　初版発行

発行：FOUNDATION
HP：
http://www.foundation-soft.jpl

【編集】
高木敬介
中野ら～めん（威風堂）

NOT FOR SALE



NOT FOR SALE